

矢作川の船紡績



明治10年（1877）、商用で上京していた三河の木綿問屋の槽谷縫右衛門の番頭が、第1回内国勸業博覧会を見物して帰り、臥雲辰致のガラ紡績機の評判を人々に語った。この話に大変興味を持った人物がいた。幡豆郡横須賀村の鈴木六三郎である。六三郎は、早速信州の臥雲を訪ね、40日間の技術指導を受けて村に帰った。

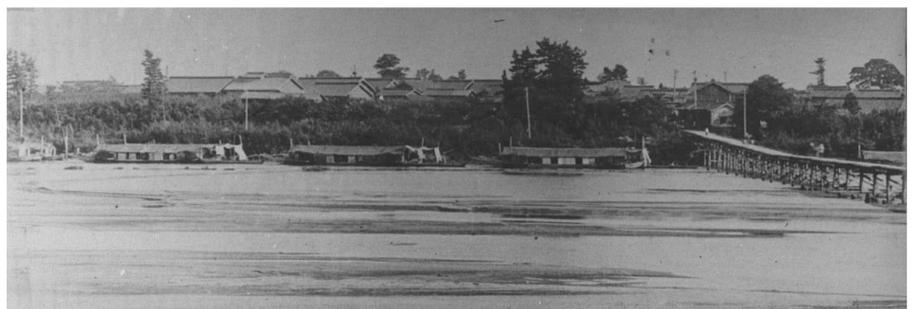
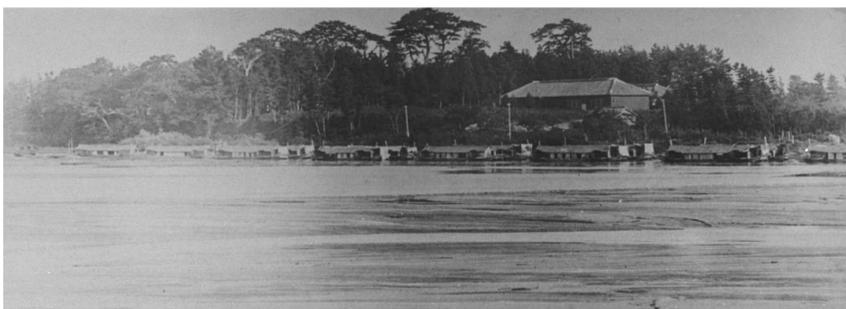
鈴木六三郎は、近くの津平観音の滝で水車によるガラ紡績機の運転を試み、はじめは失敗を重ねた。

その後、明治11年（1878）、苦心の末、矢作古川に浮かべた廃船の縁に水車を取り付けて、川の水流を利用してガラ紡績機を運転することに成功し

矢作川の船紡績、昭和8年（1933）に河川改修により終焉した。船紡績の始まりであった。この時の船の大きさは、長さ13間、幅1間半であったと伝えられる。

鈴木六三郎の成功の噂はたちまちその地域に広まり、これに注目した中畑村（現西尾市中畑町）の資産家稲垣小一郎は、家に入りしめていた中村伊之助に明治12年（1879）に船紡績を創業させている。

そのご船紡績は、矢作川流域に急速に広まった。最盛期には100艘余の紡績船が浮かんでいたという。



矢作川に浮かぶ紡績船。船は岸に固定し、川の流れで水車を回した。